

## 現代中国語の程度表現に関する研究

## 1. 論文の構成

序章 本研究の目的と構成

第1章 現代中国語における程度表現の定義及び枠組み

第2章 A類程度状語について—“有点”と“很”を中心に

2.0 はじめに

2.1 “有点”について

2.2 A類程度状語“很”について

2.3 おわりに

第3章 A類程度補語について

3.0 はじめに

3.1 “得”に後置する程度補語について

3.2 “得”を伴わない程度補語“极、死”について

3.3 おわりに

第4章 B類程度状語について—“更”、“还”と“比较”を中心に

4.0 はじめに

4.1 “比”構文で用いられる程度状語“更”、“还”について

4.2 “比”構文で用いられない程度状語“比较”について

4.3 おわりに

第5章 B類程度補語について—“多”と“一点”を中心に

5.0 はじめに

5.1 程度差が大きいことを表す表現“多”について

5.2 程度差が小さいことを表す“一点”について

5.3 おわりに

終章 結論

## 2. 各章の概要

## 第1章 現代中国語における程度表現の定義及び枠組み

まず「程度」と「程度表現」を以下の通りに定義した。

・**程度**：ある基準に照らし合わせて測った事物の高低、強弱、優劣などのような性質・状態の度合のことである。

・**程度表現**：事物の性質や状態の度合を表す表現である。

程度表現(程度状語、程度補語)は一部の名詞や一部の非動作動詞フレーズとも共起するが、主に性質形容詞、心理動詞と共起するという特徴を持つといえる。

第1章では、さらに程度状語・程度補語の共起制限及び統語的特徴について考察し、中国語の程度表現の枠組みの構築を行った。

程度状語と程度補語を全体的に概観して分類する先行研究はほとんどなく、比較対象があるか否か(比較構文に用いられるか否か)を基準にして、程度副詞を「相対程度副詞」(比較構

文に用いられる)と「絶対程度副詞」(比較構文に用いられない)に分類するのが一般的である(王力 1943、张谊生 2004、马庆株 2005 など)。しかし、「絶対程度副詞」でも“比起”構文で用いられるケースが多く見られる。

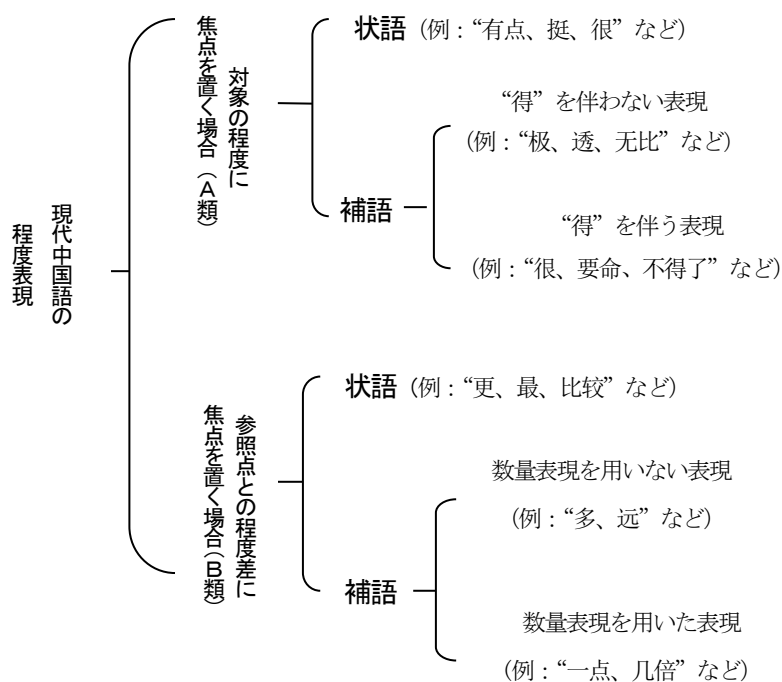
(1) 和在山西比, 现在就挺满足。<CCL 语料库/报刊精选 1994.06>

[山西にいたときに比べ、今はとても満足している。]

(2) 比起欧美国来, 这数字就太小了。<CCL 语料库/1994 年市场报>

[欧米各国に比べたら、この数字はあまりにも小さすぎる。]

そこで、本研究では焦点に着目し、意味的特徴及び統語的特徴に基づき、程度副詞だけでなく、程度補語も含めた程度表現全体の枠組みを次のように提案した。



(図 1)

## 第2章 A類程度状語について—“有点”と“很”を中心に

A類程度状語は程度副詞からなるものが多く、対象の程度の高低を表す役割を果たす。例えば、“有点[少し]、有些[少し]”などは低い程度を表すが、“很[とても]、挺[かなり]、相当[相当]、非常[非常に]”などは高い程度を表す。A類程度状語になる程度副詞は形容詞や心理動詞と共起するという点で共通しているが、それぞれ独自の特徴を持っている。たとえば、“有点”はマイナスの意味の語と共起する傾向があり(吕叔湘主編 1980、周小兵 2002 など)、“很”は程度状語だけではなく、程度補語になることもできる。

“有点”については、先行研究では変化を表す文脈では中性、プラスの意味の語と共起することが可能であると論じられているが(胡振刚 2002、马真 2004、张谊生 2004 など)、次の例のように変化を表さない場合であっても、“有点”と中性あるいはプラスの意味の語が共起するような用例が多くみられる。

(3) 茂才心里有点明白, 神情反而淡淡的。<朱秀海《乔家大院》>

[茂才は内心ではちょっと分っていたが、表情は冷ややかであった。]

- (4) 今夜的情形有点特别，那美好的形象，牢牢地粘在脑海里，任什么理智也赶不开了。 <叶蔚林《蓝蓝的木兰溪》>

[今晚の状況は少し特別であり、その美しい姿がしっかり脳裏に焼き付いていて、どんな理性でも記憶から抹消することができない。]

第2章では参照点が想起できる場合には中性・プラスの意味の語と共起することが可能であるという仮説を立て、“有点”の共起制限を探った。

1) 顕在的な参照点がある場合

- ・文中に“与～相比”“相比之下”などの語句があり、参照点が明確に提示されている場合。
- ・述詞自体に顕在的な参照点が提示されている述詞“相似”、“像”など。

2) 潜在的な参照点がある場合

A. 外的参照点

- ・文脈で判断する

- (5) 两人进了蜀云镇，很快随意找了一家看起来还算是有点干净的客栈。 <破军刀《欲望腾飞》>

[二人は蜀雲町に入っすぐ、見たところまだちょっとはきれいといえる旅館を見つけた。]

- (6) 这种传说可靠不可靠不是我们要管的事，不过这种钱确实有点可爱——农村里的青年小伙子们，爱漂亮的，常好在口里衔一个罗汉钱，和城市人们爱包镶金牙的习惯一样…… <赵树理《登记》>

[この伝説が本当かどうかは私たちの知るところではないが、このお金は確かにちょっと可愛らしい——村の若者はおしゃれが好きで、都会の人が金歯をする習慣があるのと同じように、羅漢錢を口にくわえる習慣がある…]

- ・語自体には、他者と異なるというニュアンスが含意されている述詞“特殊”、“特別”、“独特”など。

B. 内的参照点

- ・心的状態を表す述詞“相信”、“高兴”、“佩服”、“喜欢”、“明白”など。(通時的)
- ・“特殊”、“特別”、“独特”など。(通時的)
- ・“渐渐”、“慢慢”[だんだんと]などや変化を表す方向補語“(开始)～起来”[なり始める]が文中にある場合。(通時的)
- ・述詞自体に変化のニュアンスが含まれる“増加”、“提高”など。(通時的)
- ・次の例のように同じ主体に異なる性質が存在する場合。(共時的)

- (7) 人们都说染坊里那女孩怎么怪模怪样的，却又有点美丽。

<苏童《蓝白染坊》>

[人々はみなあの紺屋の娘はどこか風変わりであるが、ちょっときれいだと言おう。]

- (8) 她没立即回答，两只眼睛忽闪忽闪眨着，似乎在回味着桃花的滋味，“有点甜，有点酸，有点香……” <尤凤伟《诺言》>

[彼女はすぐには答えず、二つの目がきらきらとまばたいて、まるで桃の花の味を思い出しているようであった。「ちょっと甘くて、酸っぱくて、芳ばしくて…」]

一方、程度が高い表現“很”は“很好”の“很”のような程度状語だけではなく“好得很”のような程度補語としても用いられる。また、次の例で示すように、“很+P”の使用範囲は“P+得+很”より広い。

- (9) 森林里贴出一张通知：订于月亮<sub>A</sub>很圆很圆(→\*圆得很圆得很)的晚上，举办快乐晚会

欢迎大家参加。大象看见了：“噢，开快乐晚会，唱歌<sub>B</sub>很快乐(→<sup>?</sup>快乐得很)，跳舞<sub>C</sub>很快乐(→快乐得很)。”……他整整忙了两天，看看布置一新的草地，<sub>D</sub>很满意(→满意得很)，同时也感到<sub>E</sub>很疲劳(→疲劳得很)，便打了一个呵欠，躺下来睡着了。

＜《中国童话百篇・快乐晚会》＞

[森に次のようなお知らせが貼り出されました。「お月様がまん丸になる夜にハッピー・パーティーを行います。皆様のご参加をお待ちしております。」象さんはそれを見て、「へえ、ハッピー・パーティーか。歌を歌うのはハッピーだし、踊るのもハッピーだな。」(中略)象さんは丸二日忙しく働きました。見違えるように飾り付けされた草地を見て、とても満足しましたが、同時にとても疲れを感じたので、あくびを一つすると、横になって眠ってしまいました。]

第2章の後半では程度補語“很”との比較を通して、対照の観点から程度状語“很”の意味機能を中心に分析した。分析の結論は次の通りである。

1) “很+P”の焦点は“P”にあるが、“P+得+很”の焦点は“很”即ち程度が高いことにある。



(図2)

2) “很+P”は已然と未然のどちらにも用いられるが、“P+得+很”は已然の場合に用いられる傾向がある。

(10) a. 这件衣服穿起来感觉很好。(→ 好得很)

[この服を着ると、とてもいい感じです。]

b. 对于商人来说，最重要的是衣服穿起来感觉一定要很好，这样才能产生自信。

(→ \*好得很) <CCL 语料库/《哈佛经理领导权力》>

[商人にとって、最も重要なのは服を着たとき必ず自己陶醉することだ。

そうすれば、自信が生まれる。]

3) “很+P”は客観的に事柄を述べようとする場合に用いられるが、“P+得+很”は強意的で、主観的である。

(11) 经多次考察表明：月球上的物质组成与地球很相似，月岩中含有铝、钙、铁、硅、钛、镁、钾等 66 种元素，很有开发价值。(→<sup>?</sup>相似得很) <CCL/《儿童百科全书》>

[何回もの調査から、月の物質の構成は地球にとっても似ており、月の岩石にアルミニウム、カルシウム、鉄、珪、チタン、マグネシウム、カリウムなどの 66 種類の元素が含まれており、とても開発の価値があることがわかった。]

程度状語“很”は順を追って物事のありさまを述べる意味機能があるが、補語としての“很”は已然の状態に対して自分の意見や評価を強く主張するニュアンスを帯びている。叙述性を持つ“很+P”は、述語以外にも連体修飾語、連用修飾語、補語になることが可能であるのに対し、“P+得+很”は、前提である P が已然の状態を表しており、焦点が補語成分の“很”にあるため、述語以外の成分になりにくい。また、程度状語“很”と程度補語“很”の間に存在する意味的相違は中国語の程度状語と程度補語の相違の一端を示していると考えられる。

### 第3章 A類程度補語について

A類程度補語には“得”を伴う表現と“得”を伴わない表現の二種類がある。

“得”を伴う表現については、“很、要命、要死、不得了”などの表現が程度表現として認められているが、“难受得快要死了”[辛くて死にそうだ]の“快要死了”のような補語が程度補語であるか否かについては意見が分かれている。また、一部の中国語テキストでは、「程度補語」と「様態補語」(または「状態補語」)の区別がされていない。第3章の前半では程度補語について定義し、“难受得快要死了”の補語のような語句も程度補語の周縁的表現であることを論証した上で、“得”を伴う補語を下位分類し、それぞれの文法的特徴と意味的特徴について分析した。

・ “难受得快要死了”の補語について

“被打得快要死了”[死にそうなほど殴られた]と“难受得快要死了”[死にそうなほど辛い]は次の(12)、(12')で示されるように本質から異なっており、それぞれ「様態補語」、「程度補語」として区別することを提案した。

(12) a. 被打得快要死了。⇒ \*很被打 [殴られて死にそうだ。]

b. 难受得快要死了。⇒ 很难受 [辛くて死にそうだ。]

(12') a. A: 他被打得怎么样了? /\*有多被打得? [彼はなぐられてどうなった?]

B: 被打得快要死了。[死にそうだよ。]

b. A: 他有多难受? /\*他难受得怎么样了? [彼はどのくらい辛い?]

B: 难受得快要死了。[死にそうだよ。]

本研究では“得”を伴う程度補語を「“得”に後置し、形容詞や心理動詞のような程度性のある語と共起する補語は、程度補語である」と定義した。

・ “得”を伴った長いフレーズからなる程度補語には主に以下のような3種類がある。

1) 誇張的表現(極端性)

極端な事柄を取り上げて、程度の甚だしさを表す。

(13) 宋真宗高兴得简直要跳起来。<林汉达・曹余章《中华上下五千年》>

[宋真宗は跳び上がるほど喜んだ。]

2) 比喩的表現(類似性)

補語部分に比喩的表現が用いられる場合、常に“似、像、如、如同、犹如、好像、好似、像/跟……似的、像/跟……一样”[~のように/みたいに]などのような比喩指標を伴う。

(14) 镜子里的国王多胖呀，胖得像个充足气的气球……<《胖人国的灭亡》>

[鏡の中の国王はなんて太いんだろう。太くて空気をいっぱい入れた風船みたい…]

3) 写实的表現(結果性)

補語の部分表す事柄は、実際に起こったことを表す。

(15) 那天晚上，我高兴得一夜没睡好。<扬子晚报 2007.8.23>

[その夜、私はうれしくて一晩中よく眠れなかった。]

“得”を伴わない表現としては、“极、死、坏、透、疯……”などが挙げられる。これらの表現は、次の例(16)が示すようにすべての形容詞と共起することができるというわけではない。

(16) a. 帅极了 | ?帅死了 | \*帅坏了 | \*帅透了 | \*帅疯了

[非常にかっこいい]

b. 伟大极了 | \*伟大死了 | \*伟大坏了 | \*伟大透了 | \*伟大疯了

[非常に偉大である]

第3章の後半では、とりわけ使用頻度の高い表現の“极”と“死”を取り上げ、動詞としての

意味と程度表現としての機能の間どのような関係があるのかについて分析した上で、各種類の形容詞との共起について論じ、それぞれの意味と用法についてもあわせて考察を行った。

・“了”は程度補語の一部であるか否か

- (17) 〈高兴极〉了 [非常にうれしい]  
      〈伤心死〉了 [死ぬほど悲しい]  
      〈羞死人〉了 [とても恥ずかしい]  
      〈恨极〉了我自己 [自分を非常に憎んでいる]

・原義について

“极”はもともと「建物の一番高いところにある棟木」という意味を表す名詞であり、その後、「一番高いところ」という意味から「頂点」、「頂点に達する」そして「最も高い程度に達する」という意味に派生した。一方、“死”はもともと「死ぬ」という意味を表す動詞であり、動詞に後置した場合は、何らかの動作行為で「死んだ」状態になるという意味を表す。“热死了”[暑くて死にそうだ]のように形容詞や心理動詞に後置して「死ぬぐらい、死にそうなほど」という誇張的に高い程度を表している。

・形容詞を「属性判断形容詞」、「褒貶評価形容詞」、「感覚感情形容詞」の三類に分けて“极”、“死”との共起制限について考察した結果は次の通りである。

“极”はもともと中性の意味を持っており、ほとんどの形容詞や心理動詞と共起することができる。それに対し、もともと「死ぬ」というマイナスのニュアンスを持つ補語“死”は、近年“好看死了”、“高兴死了”のような程度を誇張する表現としての使用が散見されるが、“\*伟大死了”、“\*崇高死了”のような表現は成立できず、マイナスの意味の形容詞と共起する傾向がある。

“得”を伴わないA類程度補語は語自体の原義がその共起制限を大きく左右するといえる。

#### 第4章 B類程度状語について—“更”、“还”と“比较”を中心に

第4章では、“比”構文で用いられる“更”、“还”、及び“比”構文では用いられない“比较”を取り上げて、それぞれの意味機能と用法を明らかにした。

“比”構文で用いられる“更”と“还”は、ともに「さらに」という累加の意味を表すことがあり、置き換えられる場合が少なくない。しかし、“还”は程度差を表す補語“多”や数量補語などと共起することができるのに対し、“\*更长多了”、“\*更高三厘米”のように、“更”とは共起しにくい(cf. 陆俭明 1993)。また、次の例(22b)のような場合、“还”を用いることができるが、“更”は用いにくい(cf. 中桐 1997, 大島 2000)。

- (18) a. 白鹏比朝青龙还胖。(→ 更)  
      [白鹏は朝青龙よりも太っている。]  
      b. 那小孩胖乎乎的, 简直比朝青龙还胖。(→ ?更)  
      [あの子はぼちゃぼちゃしていて、まるで朝青龙よりも太っている。]

・“还”と“更”のニュアンス

例(18a)は白鹏が参照点の「朝青龙」より太っていることが事実である可能性があるため、“更”に置き換えることが可能となる。しかし、この場合の“还”は「朝青龙」の程度のほうが高いと思われがちだが、実際には「白鹏」の程度のほうが高いという「逆説的」で、「意外である」というニュアンスを帯びている。それに対し、“更”は「間違いなく事実である」という「確実」であるという判断を帯びている。例(18b)の参照点「朝青龙」は単なる喩えとして挙げられ、“还”は、程度の高い参照点を喩えとして導入する機能があり、「逆説的」、「意外である」というニュアンスからさらに「誇張的」なニュアンスも強く読み取れる。“更”に置き換えると、話し手が「あの子どもは参照点の朝青龙より実際に太っている」と強く断定しているように読み取れてしまう。

・“比”構文との関係(cf. 中桐 1997)

次の例で示すように、“更”は「(参照点よりは)一段と程度が高い」ということを表すのに対し、“还”は「参照点よりも程度が高い」というように参照点に焦点が置かれる表現である。そのため、“更”は“比”構文に「依存」しないが、“还”は“比”構文に「依存」する。

(19) a. 这座双层大桥比南京长江大桥更长。

[この二層大橋は南京長江大橋よりずっと長い。]

b. 这座双层大桥比南京长江大桥还长。

[この二層大橋は南京長江大橋よりもさらに長い。]

(19') a. 这座双层大桥更长。[この二層大橋はずっと長い。]

b. <sup>#</sup>这座双层大桥还(算)长。[この二層大橋はまあまあ長いです。]

一方、“比较”は“比”構文には用いられないものの、比較対象が提示される場合には用いられるケースが多い。

(20) A1: 上个月我去北京玩了。[先月、北京に遊びに行ったよ。]

B1: 是吗? 你觉得北京怎么样?[そう?北京はどうだった?]

A2: <sup>?</sup>我觉得北京比较好。

B 類程度状語は比較対象が存在する場面に用いられ、比較対象と照らし合わせる「相対性」を持っているといえる。しかし、“比较”は次の例(26)のように比較対象が提示されない場合にも用いられ、B 類程度状語に共通する「相対性」以外の特徴も持っていると考えられる (cf. 时卫国 2006 : 75)。

(21) 明远这个人比较谨慎。<姚雪垠《李自成》>

[明遠は比較的慎重である。]

・“比较”は「相対性」以外にも、「どちらかといえば対象の程度のほうが高い」という「弁別的」なニュアンスを含む。

(21') A: 你觉得北京好不好?

[北京は良いと思いますか?]

B: 怎么说呢? 我觉得北京还比较好吧。

[どういったらいいかな?まあまあいいと思います。]

・表される程度については、“比较”は場合によって、「かなり」のような高い程度として理解される可能性もあれば、「ちょっと」のような低い程度として理解される可能性もある。また、“比较”は不定数量フレーズ“一些、一点”とは共起することができるが、具体的な数字を用いる数量詞は“比较”の表す程度の曖昧さと相容れないため、“比较”とは共起しない。

## 第5章 B類程度補語について—“多”と“一点”を中心に

第5章では、B 類程度補語の典型例である“多”を用いた表現と“一点”を用いた表現を取り上げ、それぞれの意味機能と文法機能を考察した。

「程度差が大きい」ことを表す“多”が用いられた表現には“V+多+了”、“V+得+多”、“V+程度副詞+多”などのタイプがみられる。この三つのタイプは次の例(22)、(23)のように互いに置き換えられる場合もあれば、置き換えられない場合もある。

(22) 实际上, 人类的生活, 比你刚才编的那个故事复杂多了。(→ 复杂得多/复杂很多) <倪匡《黄金故事》>

[実際には人の生活は貴方がさっき作ったその物語よりずっと複雑だ。]

(23) 他的伤口今天好多了。(→ <sup>?</sup>好得多/<sup>?</sup>好很多)

<CCL 语料库/《战争与和平》>

[彼の傷は今日はずいぶん良くなりました。]

・ “P+多+了”には「変化」の意味あるいは「感嘆」の語気を表す“了”があるため、「共時的比較」を表すことができるだけでなく、「通時的比較」を表すことも可能であり、文脈により「以前より程度差が大きくなった」ことを表す場合もあれば、「参照点との程度差が大きいことに対する驚嘆の語気」を表す場合もある。

・ 一方、“了”がない表現“P+得+多”と“P+很+多”には「変化」の意味、「感嘆」の語気が含まれないため、共時的比較を表す傾向があり、程度差が大きいことを客観的に述べようとするニュアンスが読み取れる。

「程度差が少ない」ことを表す“一点”が用いられる表現には、主に“P+一点”と“P+了+一点”の二つの表現がある。また、“有点咸了”[ちょっと塩辛い]と“咸了一点”[ちょっと塩辛い]のように“P+了+一点”にはA類程度状語を用いた表現“有点+V+(了)”との置き換えが可能な場合もあるが、例(24)、(25)のように置き換えられない場合が多い。一般に“有点”は主に好ましくないことに用いられ、プラスの意味の語とは共起しないとされている (cf. 岡部 1990, 胡振剛 2002)。

(24) 一直倒不准 50 毫升, 要不是多了一点, 就是少了一点……

(→ \*有点多, \*有点少) <邓捷《50+50≠100》/中国教育网>

[ずっと正確に 50 ミリリットルに入れることができなかった。ちょっと多かったり、少なかったりだった…]。

(25) 今天有点冷。(→ \*冷了一点)

[今日はちょっと寒い。]

考察の結果は次の通りである。

・ “P+一点” 「(比較して) 程度差が少しである」ことを表す

・ “P+了+一点” Pによって意味が異なる(特に比較対象が文中に提示されていない場合)

Pが中性・プラスの意味の語である場合、“P+了+一点”は「程度差が少しあるようになった」という変化の意味を表す傾向がある。一方、Pがマイナスの意味の語である場合、「ちょっと基準から超えてしまった」、「ちょっと～すぎる」というような残念あるいは不満な気持ちを表すことになる。

本研究の考察でわかるように、中国語の程度表現はバラエティーに富んでいる。例えば、同じA類程度表現でも程度状語と程度補語では意味機能が異なる。A類程度状語は単に対象の程度が高いか低いかを表し、叙述的な表現が多い。それに対し、A類程度補語は対象の程度が高いという状態を表し、強意的かつ具体的にその程度の高さを表す。また、B類程度表現は対象と参照点の程度差に焦点を置く点において共通しているが、B類状語とB類補語の表す重点は異なる。B類程度状語が用いられる場合、参照点より程度が高いことを表すが、参照点によって対象の程度が判断されるため、相対的なニュアンスが強い。一方、B類程度補語はどのくらい程度差があるかを具体的な数量を用いて表すことから、「数量的」な表現であるといえる。

### 3. 参考文献 (省略)